

## 泊3号機を「原発帝国復活」の狼煙にさせるのか！ ～ やらせ2重チェックでストレステストも免除 ～

我が北海道の泊原発3号機が、全国で調整運転・定期検査で停止している原発に先駆けて16日にも再稼動する情勢にあることが明らかになった。道民の一人としてはずかしいかぎりだ。「安全神話」が完全に崩壊し、全ての原子力発電所の安全基準を根本から見直さざるを得ない中、ストレステストさえ受けないまま営業運転再開。原子力村はこの営業運転再開を足掛かりに、「原発帝国復活」の狼煙を上げることになるだろう。～ まずはニュースより ～

### 泊3号機 知事、16日にも容認表明 営業運転に即日移行(08/13 09:27)

高橋はるみ知事は12日、調整運転中の北海道電力泊原発(後志管内泊村)3号機の営業運転再開を容認する考えを16日にも表明する方針を固めた。原子力政策を審議する道議会特別委員会を16日にも開き、委員会での議論と地元町村の意向を踏まえた上で海江田万里経済産業相に道として再開に同意することを伝える。海江田氏はこれを受けて検査終了証を交付、同日中にも3号機は営業運転に移行する。知事は地元としての意見集約に向け、11日から道議会や泊原発から半径10キロ圏内の後志管内4町村(泊、岩内、共和、神恵内)との協議を開始した。12日には、道議会との間で産炭地域振興・エネルギー問題調査特別委員会を16日か17日に開き、3号機の営業運転再開に対する道としての考え方を説明し、議論する方向で最終調整に入った。<北海道新聞8月13日朝刊掲載>

地元軽視の北電に対し高橋知事も一応遺憾の意を表明はしたものの所詮ガス抜き程度だった。原発マネーの恩恵を受ける後志管内4町村(泊、岩内、共和、神恵内)は早々に容認姿勢を表明したが、それ以外の市町村は何の説明も受けないままだ。にもかかわらず知事は再開を認めるのだと言う。福島原発事故の被害の広がりを見れば、4町村の意向だけで決めていいわけがない。一度事故が起きれば西よりに位置する泊原発から出た高濃度の放射能は全道一体を汚染することはすでに明らかなことだ。全道の市町村首長は意見表明すべきだ。

### 単なるやらせにしかすぎなかった2重チェック体制

保安院と原子力安全委員会が同じ穴のムジナでしかない機関であることが明らかになり、経産省から切り離しの方向性が出されている。その最中、泊3号機営業運転に際して原子力安全委員会の内容にやらせと言われても仕方がない構造があらためて露呈した。～ 以下、原子力安全委員会 傍聴参加者の証言より ～

8月11日に開催された原子力安全委員会において、泊3号営業運転再開について保安院からの総合負荷性能検査について15分ほどの説明が行われた。その後、10分程度、簡単な質疑が行われ終了。斑目委員長は、「泊3号の安全性、定期検査については、保安院がしっかりとやるものです。今日の議題にあげたのは保安院が報告したいからと言ったからです」と述べました。傍聴人からは、「安全委員会は、きちんと審議して見解を述べるべき」「二重チェックではない」「こんなお手軽な会議で、泊を動かしてよいのか」「道民はこれでは納得できない」などの怒りの声があがりました。3時頃、委員長が休憩と宣言し、3時40分ごろに再び委員長が登場し、「今日はこれで閉会とします」と述べて閉会となりました。

これが2重チェック体制の実態である。その後、市民団体と政府との交渉が行われ以下のような見解が出されたそうである。

- ・「十分な理解が得られているとは言い難い状況にある」との政府見解 ⇒ 原子力安全委員会と食い違う見解
- ・泊3号だけを通常の定期検査のみという停止中の原発よりもはるかに軽い条件で運転再開をする理由 ⇒ 保安院は明確な答えを示さず
- ・保安院は、「北海道の了承なしに、泊3号を動かすことはない」と発言
- ・原子力安全委員会・保安院の「やらせ」問題については、「やらせがあったかどうか、保安院としては正式には今は調査中なのでわからない」と発言

結局、泊原発3号機営業運転は4町村の意向と保安院の判断だけで決まるということだ。道民もバカにされたものだ。泊3号機は「原発帝国復活」の記念すべきシンボルとして全国民に記憶されることだろう。

# 抜け穴だらけの「再生エネルギー特別措置法」

～ 「脱原発」の政府方針をあざ笑う北電の傲慢極まりない姿勢 ～

それにしても私の中には北電の立場を少しは理解しようとする心理もあったように思う。「国策で押し付けられた原発を、本当は嫌だけれども運転せざるを得ない立場もある」と。そう考えていた私はただのお人よしだったようだ。

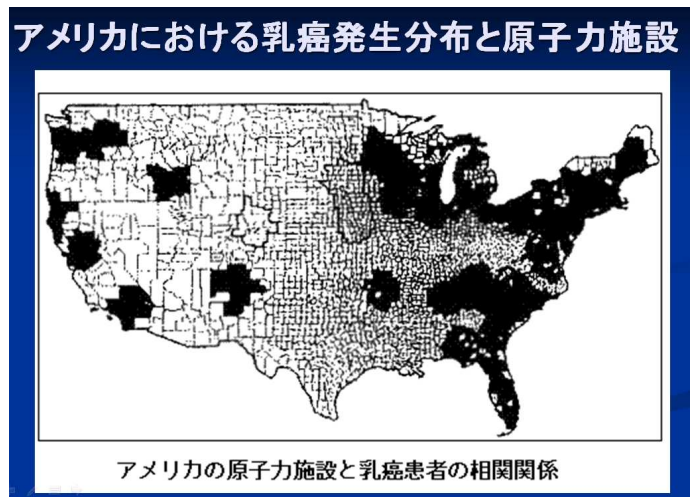
北電の社長は記者会見で3号機営業運転へ向けた審査について、「道の同意がなくても、国が受け付けると言うならば出す」と強弁したのだ。さらに驚いたことがある。

**風力など自然エネルギーによる発電の全量買い取りを電力会社に義務づける「再生エネルギー特別措置法」が施行されても、風力発電の新たな買い取りをしない方針**なのだという。北電という会社がかくも傲慢な企業だったのである。

もはや同情の余地はない。いつか電力自由化が実現したらこんな会社とは直ぐにおさらばしたい気持ちだ。北電にとって私たちは客ではなくただの「ネギをしょったカモ」だったということだ。社長の記者会見を見ていたら「俺たちがお前たちのために電気をつくって売ってやっている、ごちゃごちゃいうな」とでも言いたいような態度であった。

菅首相が退陣の条件の一つに掲げたこの法案も、原子力村の勢力の巻き返しと、それに群がる議員や官僚の画策ですっかり「ざる法」と化し、北電社長にさえ軽くあしらわれている有様だ。あ～一体この国はいつから我欲に毒された人間ばかりが権力を持つようになったのか。原子力発電は「いのち」をむさぼり喰らいながら企業利益を出す「死の商人」であることの自覚はこの社長にはどこにもない。

原発からは日常的に放射性物質が漏れ出している。アメリカにおける乳癌の多発地帯と原子力関連施設の場所が重なるのはそのためだ。泊村周辺地域にガンが多いのも無関係ではない。電力会社は人々の暮らしといのちを守る使命があるはずだ。経営陣はとくこの事実を見極めるべきだ。過去の通信に掲載した資料だが、再度、載せるのであらためて原子力発電の現実を知ってほしい。この現実こそ世界の原子力推進勢力が隠蔽したい事実である。



## アスベストと放射能内部被曝の関係

～ 対策を急がなければさらにリスク増大 ～

数年前、日本ではアスベストパニックが起きた。発がん物質であるアスベストによる大量の死亡者がいたことを企業が隠蔽していたことが発覚したからだ。その後、研究がすすみアスベストの発ガン作用と放射能による内部被曝が密接に関係していることがわかってきた。東日本大震災の膨大な瓦礫には大量のアスベストが残留している。早急な対策をしなければ、さらにリスクは増大する。放射能はあらゆる疾病と関係している一つの現実 ～ ニュースより ～

## アスベスト吸入、肺にラジウム蓄積 内部被ばくでがん化ー岡山大学チーム【毎日新聞】2009年7月28日

アスベスト(石綿)吸入による中皮腫や喫煙などによる肺がんが起こる仕組みを、岡山大の中村栄三・地球物質科学研究センター長らの研究チームが解明した。石綿やたばこ、粉じんに含まれる鉄が肺に入ると、鉄を含む「フェリチン」というたんぱく質が形成される。フェリチンは大気中などにある放射性物質ラジウムを集めて蓄積させ、がんを引き起こすという。研究チームは中皮腫や肺がん患者の手術後の肺切片を詳しく調べた。すると、6人の中皮腫患者のフェリチンからバリウム、鉛、カドミウムなどの重金属が検出された。中でもラジウムは海水中の100万～1000万倍に相当する高濃度だった。肺がん患者6人でも同様の傾向がみられた。

研究チームは、高濃度のラジウムが出す放射線で強力な内部被ばくが起き、肺組織の遺伝子を損傷させてがんを発生させると結論付けた。研究チームの岡部和倫(かずのり)・国立病院機構山口宇部医療センター呼吸器外科医長は「肺のラジウム蓄積量を調べる技術や、肺のフェリチンを溶かす薬剤を開発できれば、早期診断や治療につながる」と話している。

【下桐実雅子】